JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	エスノ認識論とそれに基づくメタ認識論の探究
Author(s)	水本，正晴
Citation	科学研究費助成事業研究成果報告書：1-5
Issue Date	2018-06-08
Type	Research Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/15386
Rights	
Description	基盤研究(C)（一般），研究期間：2014～2017，課題番号：26370010，研究者番号：70451458，研究分野：Analytic Philosophy

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成　３０　年　　６　月　　８　日現在

機関番号：　１３３０２
研究種目：　基盤研究(C)（一般）
研究期間：　2014～2017
課題番号：　２６３７００１０

研究課題名（和文）エスノ認識論とそれに基づくメタ認識論の探究

研究課題名（英文）Ethno-Epistemology as a Meta-Epistemological Inquiry

研究代表者
水本　正晴（Mizumoto, Masaharu）

北陸先端科学技術大学院大学・先端科学技術研究科・准教授

研究者番号：７０４５１４５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：平成２８年度にスティッチ教授やガネリ教授らと協力し、Ethno-Epistemology と題した国際会議を開催し、言語学者、社会心理学者、人類学者らを招いて学際的な会議を成功させた。また、スティッチ教授らと共同編集した論文集Epistemology for the Rest of the World をまとめ上げ、最終的にオックスフォード大学出版からの出版が正式に決まった。これはエスノ認識論に特化した最初の論文集であると言える。
日本語の「知っている」と「分かっている」の認識論的に重要な文脈における振る舞いの大きな違いを明らかにし知識概念の複数性を指摘した論文もその中の一遍として出版される。

研究成果の概要（英文）：With Stephen Stich, Jonardon Ganeri,and others, we held in 2016 the conference entitled "Ethno-Epistemology," an international conference that focused on the epistemological consequences of linguistic and cultural diversity, which was also an inter-disciplinary conference, inviting keynote speakers from the fields of linguistics, social psychology, and cultural anthropology.
Also, with S. Stich and E. McCready we edited the volume "Epistemology for the Rest of the World", which is to be published from Oxford University Press. This is the first collection ever which focused solely on the ethno-epistemolgical issues.
Involved in this collection is my paper on Japanese knowledge predicates "shitte-iru" and "wakatte-iru", whose radical difference in some epistemologically important contexts suggests the pluralism of the concept of knowledge.

研究分野：　Analytic Philosophy

キーワード：　epistemology　experimental philosophy　philosophy of language　meta-epistemology　ethno-epistemology　cross-linguistic study　lexical semantics　disagreement

１．研究開始当初の背景

(1) 現代分析哲学における認識論は、古代ギリシャ哲学（特に『メノン』や『テアエテトス』）からの伝統を引き継ぐものと考えられているが、知識概念は当然そうした伝統とは独立に世界に存在してきた。

(2) 特に「知っている」に対応する動詞（以下「知識動詞」）は世界の言語にあり、そのことが、認識論の著作がそれぞれの言語に翻訳され、受け入れられることを可能にしてきたと言える。

(3) だが近年、英米の認識論においては、①文脈主義とそれを巡る論争により英語の”know”の具体的振る舞いが問題にされるようになり(「新たな言語論的転回」（Ludlow 2004）)、②Ｓ・スティッチらによる実験哲学で、（後に再現性は否定されるが）ゲティアー例についての判断が文化によって異なるというデータが提出され、認識論を英語の話者の直観のみに基づいて研究することに対し深刻な問題提起がなされた(Weinburg et al. 2001)。

（４）この（３）が示唆するのは、（２）に反し、知識帰属への直観をもとに認識論を行う限り、言語・文化的差異についての考察を避けることができないということである。このことから、申請者はこれまで、①科学研究費を受け、知識概念の分析とその発達的研究（萌芽研究、課題番号20652001）を行った後、②知識帰属に関する言語的差異（基盤研究（Ｃ）課題番号23520003）をまず日本語の観点から考察し、英語の”know”と「知っている」および「分かっている」の使用の違いを考察すると共に、③2012年スティッチ教授らを招いて「”Know”in Japanese」というシンポジウムを開催した。④2013年にはそれを世界の言語に拡大し、”Epistemology for the Rest of the World”と題した国際会議を開催し、世界各国からの参加者による知識帰属の言語相対性のデータおよびその意義について広く議論した。

２．研究の目的

まずは(1)知識動詞だけでない日本語の認識論的用語（truth, justification, belief, etc．に対応する自然な日本語）の語用論的に精緻な説明を試み、それを英語のそれと比較すること、そして(2)その差異を、話者がどのような情報に注意するか、を制約する生活形式の差異として考察しながら、知識動詞の様々な言語的差異の具体例と結び付けること（その際、他の認識論的用語で知識動詞を説明するだけでなく、後者が前者を説明する、という可能性も考慮に入れる）、最終的には、(3)他の言語・文化を含めた認識の文化相対性についてのデータをもとにその認識論的含意を考察することで、メタ認識論を巡る諸議論を再検討し、認識論の地位について問い直すこと、を目標とした。

３．研究の方法

（１）知識帰属の言語的差異についての研究においては、標準的な実験哲学の方法を主に用い、統計的に日本語‐英語間、および日本語内における一般人による知識動詞の使用の統計的に有意な差異を明らかにすることを目指した。その際、

①“know”や“believe”を単純に「知っている」や「信じる」に機械的に訳すのではなく、”know”の場合は「分かっている」も同様に問うことで二つの知識動詞の違いを明らかにすることを可能にし、”believe”は「思う」を使うことでより日本語として自然な表現とすることを心掛けけた。

② 意味論的な差異を探究するだけでなく、語用論的な差異も生活形式の違いを明らかにするものとして、また意味論的な差異と語用論的な差異を見極めるためのデータとして、積極的に探究することにした。

（２）2013年の国際会議の成果を論文集として出版するため、スティッチ教授との共著で

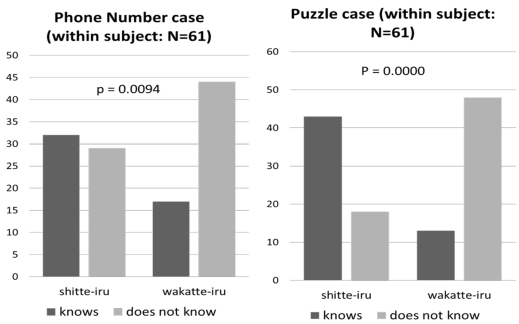
あるマニフェストをまとめ、また収録論文の解説を含む論文集全体の序文を執筆することを通し、言語的差異と認識論のあり方についてのメタ認識論的考察をさらに深めることを志した。

（３）言語的差異だけでなく、文化的・心理学的差異の認識論的含意をも考慮に入れることで、2013年の国際会議をより一般化したものとして「エスノ認識論」と題した国際会議を2015年に開催し、認識論におけるこのトピックのさらなる発展に対し国際的貢献を成すことを目指した。

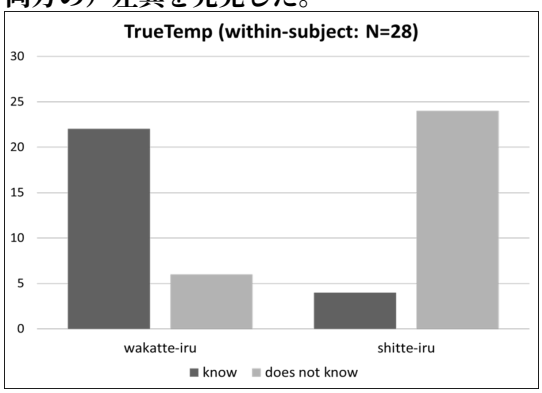
４．研究成果

（１）３の（１）に関しては、「知っている」と「分かっている」を日本語の二つの知識述語として経験的に調査を行うことで、

① 記憶を失くしたとされる場合の知識帰属において、「分かっている」は帰属されないのに「知っている」は帰属される、という効果量の極めて大きな（被験者間、被験者内両方の）差異を発見した。



② 伝統的な Truetemp の例において、①とは逆に、「知っている」は帰属されないが「分かっている」は帰属される、という（同様に）効果量の極めて大きな（被験者間、被験者内両方の）差異を発見した。



結果として③これらはその効果量の大きさから、英語のknow がどちらに近いとしても、二つのうちのどちらかは英語のknow の表す知識概念と異なる概念を表す、と言えるが、日本語の二つの動詞が知識述語である限りすでにそれらは知識概念が一つでないこと、すなわち知識についてのpluralism を強く示唆することが明らかとなった。

（２）３の（２）に関しては、上記の論文の完成とマニフェスト、序文の執筆を経てオックスフォード大学出版へ投稿し、3人の査読者による査読の結果、出版が決まった。校正を経て、2018年7月に出版される予定である。

（３）３の（３）に関しては、準備や招待講演者の都合上、開催は2016年となったが、「エスノ認識論」においては多くの海外からの出席者に恵まれ、言語学者だけでなく社会心理学者や人類学者を招き、学際的な国際会議とすることができた。現在、再びこの国際会議をもとに論文集を出版するための準備をしている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）

1. Mizumoto, M. (2018) "Know" and its Japanese counterparts, Shitte-iru and Wakatte-iru, *Epistemology for the Rest of the World*, Oxford University Press, pp. 77-122.（査読有）

2. Stich, S. and *M. Mizumoto* (2018), Manifesto, *Epistemology for the Rest of the World*, Oxford University Press, pp. vii-xvi.（査読有）

3. Arakawa, K. and M. Mizumoto (2018), Multiple Chinese verbs equivalent to the English verb ‘know’, *Epistemology for the Rest of the World*, Oxford University Press, pp. 56-64.（査読有）

4. Mizumoto, M. (2018), A simple linguistic approach to the Knobe effect, or the Knobe effect without any vignette, *Philosophical Studies* (NA).（査読有）

5. Rose David, Machery Edouard, Stich Stephen, and other 42 authors (2018), Nothing at Stake in Knowledge, *Nous* (NA).（査読有）

6. Rose David, Machery Edouard, Stich Stephen, and other 42 authors (2017), Behavioral Circumscription and the Folk Psychology of Belief: A Study in Ethno-Mentalizing, *Thought: A Journal of Philosophy*, vol. 6, pp. 193～203. (査読有)

7. Machery Edouard、Stich Stephen、Rose David、and other 42 authors (2017), The Gettier Intuition from South America to Asia, *Journal of Indian Council of Philosophical Research*, vol. 34, pp. 517～541. (査読有)

8. 水本正晴 (2016 年)、「ウィトゲンシュタインとゲーデル：対話篇」、『これからのウィトゲンシュタイン』、pp. 168-187. (査読無)

9. Mizumoto, M. (2015), Knowledge-First Semantics for Insensitive Invariantism and the Generalization of Knowledge-First Approach, *Proceedings of International Conference: Williamson, Logic and Philosophy*, pp. 134-166. (査読有)

〔学会発表〕(計１２件)

1. M. Mizumoto, X-Phi and Ordinary Language Philosophy, Australasian Experimental Philosophy Conference, Hamilton (New Zealand), July 30, 2017.

2. M. Mizumoto, When saying that one said falsehood is true – Morality's influence on truth / correctness judgment and the act – content confusion, Pluralisms Workshop, Seoul (Korea), June 11, 2017.

3. M. Mizumoto, and Rui Yang, Knowing Other Minds in English, Japanese, and Chinese, The Science of Consciousness 2017, San Diego (USA), June 8, 2017.

4. M. Mizumoto, Linguistic diversity of the use of truth predicates and morality's role in it, East-West Philosophy Forum: Knowledge, Value and Rationality, Hong Kong, April 1, 2017.

5. M. Mizumoto, One More Twist ~ Knowledge How and Ability, International Workshop of Knowledge and Action, Taipei (Taiwan) Nov. 25, 2016.

6. M. Mizumoto, Gettier and Contextualism, 科学基礎論学会, 北海道札幌市、2015 年 06 月 14 日。

7. Shun Tsugita, Yu Izumi, M. Mizumoto, Knowing How and Two Knowledge Verbs in Japanese, International Conference on Ethno-Epistemology ~ Culture, Language, and Methodology ~石川県金沢市、2016 年 6 月４日。

8. Mizumoto, M. Knowledge in Philosophy and X-Phi, JAIST International Symposium on Knowledge Science, 石川県金沢市、2016 年 3 月 15 日。

9. Mizumoto, M. Knowledge-First Semantics for Insensitive Invariantism and the Generalization of Knowledge-First Approach, International Conference: Williamson, Logic and Philosophy, Beijing (China), Oct. 16, 2015.

10. M. Mizumoto, Knowledge of Meaning as Anscombe's Practical Knowledge and Its Implication to Virtue Semantics, East-West Philosophy Forum, Taipei (Taiwan), June 25, 2015.

11. Mizumoto, M. There is no such thing as proprioception, 行為論研究会 : International Work Shop, 東京都品川区、2015 年 5 月 31 日。

12. M. Mizumoto, The Bodily IEM, Proprioception, and the Self, Self and (its) Realization(s), 北海道札幌市、2015 年 5 月 10 日。

〔図書〕(計１件)

1. M. Mizumoto, Stephen Stich, Eric McCready (eds.), *Epistemology for the Rest of the World*, Oxford University Press, 2018, 300 pages.

６．研究組織

(1)研究代表者
水本　正晴 (MIZUMOTO MASAHARU)
北陸先端科学技術大学院大学・先端科学技術研究科・准教授
研究者番号：70451458

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
イー　マクレディー(MCCREADY　E)
青山学院大学・文学部・准教授

研究者番号：30433692

伊藤　泰信（ITO　YASUNOBU）
北陸先端科学技術大学院大学・先端科学技術研究科・准教授
研究者番号：40369864

定延　利之（SADANOBU TOSHIYUKI）
京都大学
文学部・教授
研究者番号：50235305

(4)研究協力者

唐沢かおり（KARASAWA KAORI）
東京大学・教授

Stephen Stich
Rutgers University, Professor

Edouard Machery
University of Pittsburgh, Professor

Jonardon Ganeri,
New York University, Professor